

被災者から もらった元気

水道局上水道課
折小野 修平



水道局は、日本水道協会からの応援要請を受け、3月24日、隊員4人と給水車1台と支援車1台で福島県に向けて出発。3月26日から3日間、同県いわき市において応急給水活動を行い、3月31日に帰りました。いわき市の浄水場は、幸い地震の影響が小さく水を作ることは可能でしたが、配水管が破損していたため広域にわたって断水していました。私たちは、断水した地域に給水車で水を配る作業を行いました。給水車は、2m(2ℓ)のペットボトル1000本分の水を積み込むことができるのですが、その水が無くなるまで水を待つ列は途切れず、浄水場と現地を二往復した場所もありました。

私は、現地での活動に不安を感じていましたが、そこには大変な状況にも負けずに前向きに頑張っていたらっしゃるいわき市民の姿がありました。不安どころか、「鹿児島から来てくれてありがとう」、「そちらに何かあった時には助けに行きます」などと感謝の声を聞くごとに、逆に元気をもらい給水活動の大きな活力になりました。これと同時に、今回の活動を通して、改めて水の大切さを身をもって認識することができました。

災害への備えと 早い避難を

消防局 東部消防署
田中 清



消防局が緊急消防援助隊として派遣された被災地は、宮城県石巻市でした。本市からは救助隊、救急隊、後方支援隊の3隊が派遣され、私は救急隊として、3月18日から21日早朝までの4日間活動しました。石巻市内では唯一赤十字病院が機能していたため、主に同院への避難者の救急搬送などを行いました。市内の各地に出場し目の当たりにした被災地の状況は元の町並みが姿を消し、辺り一面がれきの山と化して、想像を絶するものがありました。そして、私は救急活動で接する被災された方々に、何一つ、かける言葉を見つけないことができました。

最近、テレビ・新聞などによる被災地に係る報道の中で、復旧から復興に向かっている被災地の様子を目にしますが、その復興も「命が助かったから」であり、あの津波によって亡くなられた方たちのことを考えると「絶対に命だけは守らなければならぬ」と、改めて思います。

そのためにも、自主防災組織などを活用した防災訓練・避難訓練に取り組み、日頃から災害に備えておくことが大切だと考えます。そして、「早い避難」を市民の皆さまに訴え続けていこうと思います。



⑥横たわる消防車両(石巻市湊地区) ⑦捜索を行う隊員(石巻市大川中学校近く) ⑧基礎だけが残った住宅(南相馬市) ⑨浄水場で水を補給する給水車(いわき市) ⑩水を待ち望む人でできた長い列

①活動指示を聞く緊急消防援助隊員 ②港に乗り上げた漁船(いわき市小名浜港) ③津波によって折り曲がったガードレール(南相馬市) ④奥に見えるのは石巻市立門脇小学校 ⑤水没した街での捜索活動(石巻市釜谷地区)

大災害の 教訓を後世に

上飯支所市民生活課
蔵元 茂樹



昨年11月、千年に一度と称される未曾有の大災害に見舞われた、南相馬市ほか福島県内数カ所の被災地を視察研修しました。

すでに震災から8カ月の時が過ぎ、被災当時、テレビで目にした驚愕するような風景は、今回の視察地域では見られません。山積みのがれきと、そのがれきが撤去され住宅のコンクリートの基礎だけが残った荒涼とした土地が広がっていて、まだ復興の槌音は聞こえてこない状態でした。

この大災害を風化させることなく、支援の絆をいつまでも深めていくことが私たちにできる「心の復興」だと感じました。

被災地においての見えない放射能はとても不安でしたが、甞島で生活する私にはそれにもまして、想像を絶する地震・津波の恐怖を改めて痛感しました。3月11日以降、甞島では津波による避難訓練に力を入れています。何事に対しても絶対ということはありません。だから行政・地域・個人等々、それぞれの立場で、あらゆる事態を想定して、後で後悔することがないように準備することが肝要です。

この教訓を私たちの胸に刻むだけでなく、子々孫々に連綿と伝えることで、大災害に遭遇しても、犠牲者を最小限にすることができるのではないのでしょうか。

最後に東日本大震災で犠牲になられた多くの方々のご冥福をお祈り申し上げます。

女川町での 被災地支援

市民福祉部市民健康課
小川 妙子



このたびの被災地派遣は、鹿児島県の「心のケアチーム」のメンバーとして、5月から8月までの間、本市から延べ8人の保健師が参加し、約一週間交替で支援活動を行いました。

派遣に先立ち鹿児島純心女子大学のご協力をいただき、災害時のメンタル面の研修や、現地の状況などの情報収集を経て被災地に臨み、7月24日から6日間、宮城県女川町で支援活動を行いました。

女川町は本市と同様、原発立地町です。女川原子力発電所は高台にあったため津波による被害が無かったことから、震災直後避難所として活用されたとのことでした。当時、災害対策本部は避難所を確保することがとても大変だったそうです。

震災から4カ月過ぎた7月末の女川町は、避難所から少しずつ仮設住宅に移行する時期であり、自衛隊が引き上げる時期でもありました。私は避難所や仮設住宅への訪問や健康相談を行い、不眠や体調不良を訴える方々の話を聞くなどの支援活動を行いました。このほか、これから仮設住宅に入る方たちの台帳準備や整理も欠かせない業務でした。

短い期間でしたが、大きな悲しみと向き合いながら、不自由な生活を送っている多くの被災者がいることをいつまでも忘れてはならないこと、そして、災害は時と場所を選ばないので、日頃から危機意識を持つことが大切だと実感しました。

最後に、このたびの被災地派遣に送り出してくれた職場や家族に感謝します。